天文学とプラネタリウム

第106回

www.tenpla.net

新ワークショップ『みすまる座』好評開催中！

今月のお題

アンテナ群の真ん中で撮る全天周写真

魚眼レンズで撮る全天周写真。プラネタリウムで使えるだけでなく、平面ディスプレイで見ても独特の魅力があります。

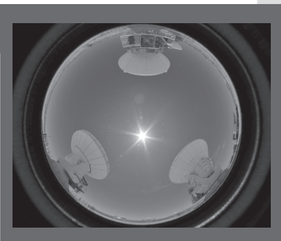
高梨直紘（東京大学）
平松正顕（国立天文台チリ観測所）

11 月下旬からほぼーか月、チリに出張してきました。出張の目的は取材対応や研究会への参加などいくつかあったのですが、その中の一つは魚眼レンズでアルマ望遠鏡の写真を撮ってくること。以前から撮りたいと思っていたし、いくつか引き合いもあったので、重い一眼レフカメラと魚眼レンズを担いで地球の反対側の山の上へ行ってきました。

チリ・アンデス山脈の広大な高地に建設されているアルマ望遠鏡。初めてこの場所に行ったのは 2003 年でした。そのころから写真を撮っていたのですが、あこの広大な風景を前にすると当時持っていたコンパクトデジカメではまったくの力不足。なかなか雰囲気が伝わらないのです。そのあと一眼レフカメラと広角レンズを買ってやっと雰囲気の出る写真が撮れるようになったのですが、欲というのは恐ろしいもので、今度は魚眼写真であの風景を再現したいと思うようになりました。広大な大地に並ぶ巨大なパラボラアンテナ、抜けるように青い空、あるいは満天の星空。手前みそながら、世界一の被写体のひとつと言っていいでしょう。ドームに投影してその真ん中に立てば、長時間の空の旅や薄い酸素に苦しめられることなくあの景色を楽しむことができます。

今回は 11 月ということで残念ながら夜空を横切る天の川は無く、月明かりも強かったのですが、それでも逆さのオリオンや大小マゼラン雲など魅力的な星たちはたくさんありました。標高 5000m での撮影は、しかし難しいことがいくつかありました。地平線まで入れてそれらしい写真を撮るには、なるべくカメラを低い位置にセットする必要があります。寝転がるようにして構図を決めてシャッターを押して、立ち上がって少し歩いてまた寝転がって。酸素が半分しかない場所でやるのはちょっと大変。昼は強すぎる太陽光に、夜は寒すぎる風にも耐えなくてはいけません。

そうして撮った写真をドームに投影してもらえる機会がありました。出張中に、東京の科学技術館で行われている科学ライブショー「ユニバース」に Skype 越しのゲスト出演の機会をいただいたのです。Skype 越しだったのでお客さんたちの細かい反応やドーム全体の様子は見えなかったのですが、魚眼レンズで撮った写真をそのままドームに投影してもらったところ、かなりの迫力・臨場感があったとのこと。まだ僕は実際にドームに投影されたところを見ていないので、早く見てみたいと思っています。そしてさらに次への欲が。同じカメラとレンズを 2 台並べて撮って、立体視にしてみたいのです。カメラ 1 台でも結構大変だったので一人で 2 台持っていくのは無理ですが、いつの日か実現したいと思っています。目の前に迫るアンテナ群と素晴らしい星空。ご期待ください。



日米欧3種の12mアンテナ。南回帰線下の午後、太陽はほぼ天頂にあります。